



被養育体験・養育体験と育児に向かう態度形成との 関連：大学生を対象とした質問紙調査を通して

寺見，陽子；及川，裕子；竹内，伸宜；竹元，恵子；松島，京；伊藤，篤

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 10(2):231-238

(Issue Date)

2017-03-30

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0041242>



被養育体験・養育体験と育児に向かう態度形成との関連

—大学生を対象とした質問紙調査を通して—

Relationship between past experience of receiving and giving care perceived by university students and their present attitude towards child rearing

寺見 陽子* 及川 裕子** 竹内 伸宜*** 竹元 恵子****
松島 京***** 伊藤 篤*****Yoko TERAMI* Yuko OIKAWA** Keiko TAKEMOTO*** Nobuyoshi TAKEUCHI****
Kyo MATSUSHIMA***** Atushi ITO*****

Summary : Recent decades have seen diverse difficulties about child rearing in Japan, and one of the reasons is thought to be immature readiness for child upbringing of the prospective parents. In order to suggest appropriate ways of promoting such readiness in children and youth, we investigated through questionnaire method the relationships among university students' perception of their caregivers (experience of receiving care), their developmentally accumulated experience of giving care to others, and their present nurturance (readiness for child upbringing). Mainly obtained results were as follows: Experience of receiving care consists of three subscales such as affectionate parents, father as active caregiver, and controlling and interfering parents; Readiness, i.e. nurturance consists of four subscales like perceived competence for child-rearing, interest in infants, anxiety and passivity of future child rearing, and, expectation for and application of local resources in one's future; Affectionate parenting, active involvement of father in child rearing, and rich experience of taking care of others are related to desired nurturance, while controlling and interfering parenting is relative to undesired nurturance. Enough child rearing needs not only being interested in infants but also feeling competent to take care of infants with the intention of making full use of local resources, and it is concluded that such readiness or nurturance could be formed by the positive experience of both receiving and providing care.

Keywords: Readiness for child rearing, Nurturance formation, Experience of receiving care,
Experience of giving care to others

1 問題と目的

今日、育児にかかわる困難が社会問題として認識されるようになって久しい。こうした困難の原因のひとつとして、子どもが親となるまでの成長過程において、育児に向かう態度（養育性）が十分に形成されていないことが挙げられる。子どもとかかわった経験や他者を世話する経験が乏しいまま、親になって初めて子どもとかかわる時に生じる世話する戸惑いや不安が、育児の困難感を高める。

国では、こうした現状を踏まえ、「子ども・子育て応援プラン（2005年度）」以降、「若者の自立とたくましい子どもの育ち」「生命の大切さ、家庭の役割等についての理解」など、次世代の親の

育成を重点課題とした内容を盛り込んだ。「乳幼児とふれあう機会の拡大」（厚生労働省）や「生命の大切さや家庭の役割等に関する学校教育の充実」（文部科学省）などを具体的施策として挙げ、保育所・児童館・保健センター等で中・高校生が乳幼児と出会い・ふれあう機会を提供し、生命の大切さや家庭の役割、保育体験を含む子育てへの理解等に関する教育を推進することとした（内閣府ホームページ 2005）。

子ども・子育て応援プラン以前からも、こうした取組の効果を検証する研究が多角的な視点から行われている。たとえば、石川（2000）は、赤ちゃんふれあい体験学習に参加した中・高校生の親に対する認識や乳児に対するイメージ・感情が肯定的な方向に変

* 神戸松蔭女子学院大学人間科学部・教授
** 日本医療科学大学保健医療学部・教授
*** 頤栄短期大学・教授
**** 四條畷学園大学看護学部・准教授
***** 相愛大学人間発達学部・准教授
***** 神戸大学大学院人間発達環境学研究科・教授

（2016年9月30日 受付）
（2016年10月31日 受理）

化したことを明らかにしている。また、田中（2000）も、赤ちゃんふれあい体験学習に参加した中学3年生の感想文を分析し、参加前よりも参加後の方が、文字数が増加し、赤ちゃんを表す形容詞がポジティブな方向へと変化しただけでなく、参加前・後ともにネガティブなままであった生徒、参加前にポジティブで参加後にネガティブに変わった生徒は極めて少なかったことを確認している。さらに、寺田（2005）は、複数回の事前学習と低月齢（0歳2～4か月児）からのふれあい、1歳まで2か月毎の継続的なふれあい、振り返りセッションなどを導入したプログラムを考案して実践した結果、小・中・高校生だけでなく協力者である親子、コーディネートする支援者、地域コミュニティなど、そのプログラムに参加した人に広く、その効果が認められたとしている。同様に、佐藤（2004）も、乳幼児とのふれあい体験学習が、子ども・若者の育児に対するイメージに影響を与えることを指摘している。

しかし、子ども・若者のすべてが、必ずしもこうした乳幼児やその親との交流を学習する機会が得られるわけではない。また、その学習内容も、カナダ発祥の「Roots of Empathy（共感の根）」のように、学習する子どもの年齢によって、長期的・継続的に養育性を育成するようなプログラムが編成されているわけでもない。

「Roots of Empathy」は、Gordon（1999）によって開発された、幼稚園時から中学生を対象とした共感性の教育プログラムである。カナダ・トロント市の公立小学校で実践されており、その趣旨は、「幼児期から共感性を育む教育をすることによって養育力の向上を図る」ものであり、長期的な展望をもって進められる教育プログラムである。幼稚園用・1年生～3年生用、4年生～6年生用、7年生～8年生用というように、年齢に応じた編成がなされている（Schoner-Reichl, Smith, Zaidman-Zait & Herzman, 2012）。これに対し、わが国で実施されているものは、その多くが単発プログラムであるという批判もある（寺村・川谷・伊藤, 2007）。今後、これまでの研究成果を踏まえた子ども・若者支援プログラムの考案が望まれる。また、意図的に計画された場での学習だけでなく、家庭や近隣など身近な環境の中での日常的な経験が、育児に向かう態度（養育性）の形成に同様の影響を与えるのか、子どもや若者の成長過程における将来親になるために必要な経験や要件、そのプロセスを規定する要因を研究的に明らかにする必要がある。

こうした観点からのこれまでの研究では、「親準備性」「親性準備性」「養護性」「養育性」などの概念を用いて研究がなされてきた。斉藤（2000）は、「大人の側からの子どもとの関係性に対する意味づけ」や「代替不能な関係というポジティブな状況が生成することによって「親と子どもがともに“かけがえのない存在”になる」ことを「親性」と定義した。そして、そうした「親性」の形成には、望ましい育児行動を引き起こすためのレディネス、心理・情緒・態度・知識といった諸側面における親の役割を果たすためのレディネスが十分備わっていること、すなわち「心理的準備状態」が必要であるとする。これを、井上・深谷（1986）は「親性準備性」としたが、岡本・古賀（2004）は、さらに「子どもが将来家族を築き経営していくために必要な子どもの養育・家族の結合・家事労働・介護を含む親としての資質（およびそれが備わった状態）」を「親性準備性」に包含している。一方、Fogel,

Melson, & Mistry（1986）は、理論的枠組みとして「nurturance」を用いたが、小嶋（1989）は、それを「養護性」と訳すとともに、「相手の健全な発達を促進するために用いられる共感性と技能」と定義しており、それは「養育性」とほぼ同義としている。

本研究は、子ども・若者が将来親になるために必要な共感性や感受性、知識・技術・構えなどの形成を、多様な体験という観点から検討しようとするものであり、その意味で、「親性」「親準備性」「養護性・養育性」といった内容のすべてを包含した枠組みとして「育児に向かう態度」という概念を用いることにした。具体的な内容としては、乳幼児とのふれあいで生じる感情、子育てに対して肯定的か否定的かといった意識、子育てに対する認識（牧野・中西 1989a・b）、乳幼児をかわいく思い慈しむ感情、自ら積極的に乳幼児の世話を行おうとする構え、実際に育児を遂行する際に求められる具体的な知識と行動力（戸田 1992）が育っているかどうかという広い概念である。

こうした将来親になるために必要な「育児に向かう態度」の形成に関する研究の多くは、既述のように中・高生を対象とした学校や地域における教育実践を対象としたものが多く、近い将来親になる可能性の高い大学生を対象とした研究はあまり多くはない。そうしたなか、前記した岡本ら（2004）は、大学生対象の調査を行い、親から受けた被養育体験（親との関係性の認知）と母親イメージ・父親イメージ、家庭における手伝い体験、子どもと高齢者についての学習やふれあい体験が、親準備性と深く関連することを明らかにしている。また、棚澤・福本・岩立（2009）は、親からの被養育体験および、きょうだい・教師・ペット等とのふれあいによる養育・世話体験と養育性との関連を、自ら開発した養育性尺度（子どもへの共感性・乳幼児に対応する技能・親になる準備性・子どもや子育てに対する非受容性）を用いて調査し、親からの被養育体験の違いが親準備性に影響を与えると同時に、児童期における被養育体験および養育・世話体験が養育性に影響を与えることを見出している。この研究では、被養育体験を母親・父親に分け、養育・世話体験もきょうだい・教師に細分化して同時に検討している点が興味深い。これらの研究はいずれも、幼少期から青年期にかけての母親・父親との関係性やそのイメージが、大学生の養育性形成にポジティブな影響を及ぼすことを示している。

しかし、今日、少子化の進行、孤立した核家族の増加、女性の就労の一般化等に伴い、家庭内の性役割や人間関係が変化し、親になる価値やあり方が曖昧になってきており、「親性」自体を問い直さなければならない現状がある。伊藤（2003）は、そうした今日の社会的背景を踏まえ、子ども・若者の親性準備性を捉え直すために、ジェンダーの視点および将来の社会的行動につながる自己効力感を盛り込んだ子ども・子育て意識調査を中・高生対象に実施している。その結果、「子どもへの親和性」「大人になることの受容性」という2因子からなる「子ども・子育て意識」は、中学から高校へと高くなり、中学生では男子よりも女子の方が高いが、高校になると学年が上がるにつれ男女差が縮まる傾向にあることが報告されている。また、その2因子と他因子との関連を検討し、「同性の親への同一化」は男子よりも女子が高く、「子どもへの親和性」および「親になることの受容性」とは弱い正の相関

関係、「対子ども社会的自己効力感」と「子どもへの親和性」とは強い正の相関関係があることを見出している。この研究は、子ども・子育て意識の変化を、中・高という時系列的な変化で捉えている点が注目される。それは、必ずしも直線的に上昇していくわけではなく、「育児に向かう態度」は、成長過程のどの時期に、どのような出会いを継続的に経験することで十全に育まれるのかという、時系列的な検討が必要であることを示唆している。

ところで、寺見（2015）・寺見・南（2015）は、すでに母親・父親になった女性・男性を対象とした調査で、母親では、「幼少期の被養育体験（親の養育態度）」が「育児ストレス」と関連し、「父親との良好な関係」が「子育てにおける夫との協力」「地域活動への積極的参加」と関連すること、また、父親についても、「幼少期の親との親密な関係」や「自身の父親との良好な関係」が「家事・育児参加」と関連することを見出し、子育ての背景要因に自身の父親との関係が重要なのではないかと指摘している。

このことから、成育過程における父親との関係が「育児に向かう態度」の形成にどのような影響を与えているのかを検討することには一定の意義があると思われる。すなわち、父親の育児参加が課題とされる今日、父親との関係が子ども・若者の養育性形成にどのように影響するのかを検討することは、今後のこれから父親・母親になる子ども・若者の支援のあり方を考えるうえでの参考となる資料を提供できると考えた。また、それが、積極的な地域活動参加と関連しているということを実証できれば、父親との関係が社会参加への契機となり、周りとの親和的關係性を形成し、社会資源やソーシャル・サポートを活用して子育てに必要な知識や技術を獲得するという育児に向かう態度の形成を促す基盤になることも提起できよう。

そこで、本研究では、これまでの研究を踏まえ、近い将来親になる可能性の高い大学生を対象に、幼少期における親との関係、ことに、父親との関係をどのように認知しているのかという「被養育経験」と、他者（乳幼児・小学生・高齢者・ペット）を養育・世話する継続的な「養育体験」の積み重ね、および「社会活動への自己効力感」「育児に関する資源を活用する志向性」が、「育児に向かう態度」とどのように関連するか、について明らかにすることを目的とした。

2 方法

（1）調査対象

筆者らが勤務するA県内の大学に所属する学生1,308名（男子194名・女子1,114名）であった。

（2）調査方法と内容

質問紙法によった。調査項目は、対象者の属性（性別・年齢）、被養育体験（自分がどのように育てられてきたかという幼少期の親との関係性の認知）に関する項目、養育・世話体験（小・中・高校生各時期における高齢者・乳幼児・小学生とのふれあいや交流体験、ペットの飼育経験）に関する項目、育児に向かう態度に関する項目で構成された。

「被養育体験」に関しては、棚澤ら（2009）の「被養護性尺度」、寺見（2015）の「成育経験および親の養育態度尺度」を参考に作成し、4件法で回答を求めた。ここでは、先行研究より、父親と

の関係性がポジティブな影響を及ぼしている可能性があることが示唆されており、養育性形成に対する父親の役割の重要性を検討するために、「父親」との関係性の認知が導出されるような質問項目の構成に配慮した。養育性と父親のイメージや父親との関係性に関しては、すでに岡本ら（2004）や棚澤ら（2009）が検討しているが、岡本らの場合は、養育役割、家族の絆を高める役割、家事労働といった役割機能としての父親評価、棚澤らの場合は、愛着と親和性尺度による父親評価が行われており、対象者自身がその父親との関係をどのように認知しているかという観点からの評価は行われていない。本研究では、過去の父親との関係を問う項目を、先行研究と照らし合わせながら、筆者らが内容的妥当性を検討の上設定した。

「養育・世話体験」については、高齢者との交流・世話体験とペットの飼育経験の有無及び小学校1～3年生時・小学校4～6年生時の乳幼児との交流・世話体験、中学生時・高校生時の乳幼児・小学生との交流・世話体験の有無を回想的に2件法による評価を求めた。成長過程における養育・世話経験の累積性ないしは継続性の影響が捉えられるように、小・中・高校の各時期を回想して回答するよう求めた。

「育児に向かう態度」については、菱谷（2009）による「次世代育力尺度」、棚澤ら（2009）の「養護性尺度」とともに、伊藤（2003）による「将来の社会的行動につながる自己効力感」の「地域にある育児に関する資源を活用する志向性が形成されているかどうか」と「育児に対する技能が身についていると自覚しているかどうか」の2項目を含め、最終的に39項目設定した。伊藤の2項目を含めたのは、地域の諸資源を積極的かつ適切に利用するかどうか、育児への有能さを自覚しているかどうか、乳幼児の養育への否定的感情・行動を緩和する効果がある（幸・浅野 2012）とされているからである。

なお、本調査の内容と実施に関しては、園田学園女子大学の倫理審査委員会から認定を受けている。

（3）手続き

調査用紙は、講義時間後に依頼文書と提出用の封筒とともに配布した。時間のある時に落着いて回答し、回答済みの調査用紙を封筒に入れて投函するよう指示した。配布数は1,400部、回収数は1,353部（回収率96.6%）であった。なお、データの入力と統計解析には、IBM SPSS Statistics Ver.21を使用した。

（4）調査期間

調査は、2011年10月～12月に実施された。

（5）倫理的配慮

回答はいつでも中断・放棄でき、個人が特定されたり学業成績や学校生活に不利益が生じたりすることはないこと、回収したデータ類はすべて消去・破棄されること、調査結果は学会等で発表され、学生対象のプログラム開発等に利用されること、調査協力への同意の確認について等を文書で提示し配布時に口頭で読み上げ、伝えた。

3 結果

全回答者のうち23歳以上および年齢不明の回答者を除き、18歳～22歳1,308名を分析対象とした。調査を実施した大学の多くが、

幼児教育・保育・福祉系の学部・学科であったため、男女比率に大きな偏り（女子1,114名、男子194名）が見られたが、どちらも多変量解析に耐えうる標本サイズであると判断し分析を実施した。また、女子と男子とでは、成育過程における被養育体験にかなり差があると考え、男女別に分析することとした。

（１）被養育体験の因子分析結果；

因子分析を実施するにあたり、極端な分布を示す項目を除くため、27項目それぞれの平均値を算出し、平均値±1SD を基準に項目を精査した。最終的に、女子については21項目、男子については22項目を対象に因子分析（最尤法・プロマックス回転）を実施した。その結果、女子・男子とも3因子が抽出された（表1、表2）。 α 係数は、第1因子から順に、女子は、 $\alpha = .782$ 、 $\alpha = .805$ 、 $\alpha = .72$ 、男子は、 $\alpha = .848$ 、 $\alpha = .783$ 、 $\alpha = .731$ 、となった。各因子に対して負荷量が高い項目の内容は、女子・男子ともに、同様の傾向を示したが、その順位や内容には若干の相違が見られた。第1因子（女子：9項目、男子：7項目）は、やさしく接してくれたといった内容であったことから「親との良好な関係」、第2因子（女子：5項目、男子：4項目）は、父親の存在が薄かった（逆転項目）といった内容、であったことから「父親との良好な関係」、第3因子（女子：5項目、男子：7項目）は、何かと私の行動を制限したといった内容であったことから「統制的・干渉的な親」と命名した。因子ごとの各項目の得点を合計した値を、下位尺度得点とした。

（２）養育・世話体験の得点

養育・世話体験得点の平均値および標準偏差は、女子がM=4.36、SD=1.43、男子がM=3.22、SD=1.81で、レンジは0～6

点であった。

（３）育児に向かう態度の因子分析結果

育児に向かう態度の項目は、（１）と同様のデータ・リダクションをおこなった。その結果、女子については28項目、男子については34項目を対象に因子分析（最尤法・プロマックス回転）を実施した。その結果、女子・男子ともに4因子が抽出された（表3、表4）。 α 係数は、第1因子から順に、女子は、 $\alpha = .896$ 、 $\alpha = .861$ 、 $\alpha = .741$ 、 $\alpha = .670$ 、男子は、 $\alpha = .906$ 、 $\alpha = .872$ 、 $\alpha = .769$ 、 $\alpha = .738$ 、であった。第1因子（女子：9項目、男子：9項目）は、子どもを上手にだめるなど「乳幼児の養育・世話に対する自信」、第2因子（女子：5項目、男子：8項目）は、子どもを見ると笑顔になるなど「乳幼児に対する関心・共感」、第3因子（女子：6項目、男子：9項目）は、わがままをいうとたたきたくなるなど「将来の育児に対する不安・消極性」、第4因子（女子：5項目、男子：5項目）は、育児サークルに入るなど「育児に関する地域資源への期待と活用志向」と命名した。因子ごとの各項目の得点を合計した値を、下位尺度得点とした。

（４）被養育体験と育児に向かう態度との相関

被養育体験の3つの下位尺度得点と、育児に向かう態度の4つの下位尺度得点との相関関係（ピアソン積率相関係数）を検討した（表5）。その結果、「親との良好な関係」については、女子では「乳幼児の養育・世話に対する自信」と「乳幼児に対する関心や共感」との間に有意な正の相関が、「将来の育児に対する不安・消極性」との間に有意な負の相関が認められたのに対し、男子では「乳幼児に対する関心や共感」と「育児に関する地域資源への期待と活用志向」との間に有意な正の相関が見られた。次に、「父

表1 被養育体験に関するパターン行列結果【女子】 (表中の*は逆転項目)

項 目	因 子			共通性
	1	2	3	
第 1 因子 親との良好な関係				
子どもの頃 私は母親と相性が良かった	.819	-.149	.106	.500
養育者が育ててくれたように 自分の子どもを育てたい	.702	.068	-.001	.546
子どもの頃 親は私を大好きだった	.680	.113	.091	.496
子どもの頃 親はいつも私に対してやさしく接してくれた	.672	-.032	.032	.411
私は自分の母親（父親あるいは養育者）のようになりたい	.624	.122	.013	.474
子どもの頃 親は私のことを理解してくれなかった *	-.454	-.043	.267	.426
子どもの頃 親は私にとって友達のような存在だった	.439	-.114	.009	.151
子どもの頃 親は私の意向を尊重し、何でも私の好きなようにさせてくれた	.361	-.067	-.260	.254
子どもの頃 父も母も忙しく 私はかまってももらえなかった *	-.339	-.091	-.076	.131
第 2 因子 父親との良好な関係				
私は父親が育ててくれたように 自分の子どもを育てたい	.083	.714	-.019	.586
私は父親が自分にしてくれたことを色々と思い出す	.001	.707	.088	.475
私には父親について良い思い出がありません *	.070	-.705	.076	.480
子どもの頃 私は父親との相性が良かった	.007	.640	.093	.391
子どもの頃 私にとって父親の存在は薄かった *	.070	-.636	.022	.371
第 3 因子 統制的・干渉的な親				
子どもの頃 親は私に対して過保護だった	.275	-.047	.754	.445
子どもの頃 親はなにかと私の行動を制限した	-.089	.067	.697	.530
子どもの頃 親は私に干渉した	.069	-.037	.670	.419
子どもの頃 親はいつもきちんとするよう私をしつけた	-.060	.139	.425	.190
子どもの頃 私は親の顔色を見ながら育った	-.282	-.065	.391	.379
因子相関				
因子 1		.512	.498	
因子 2	.512		-.261	
因子 3	.498	-.261		

表2 被養育体験に関するパターン行列結果【男子】

(表中の*は逆転項目)

項 目	因 子			共通性
	1	2	3	
第1因子 親との良好な関係				
子どもの頃 親はいつも私に対してやさしく接してくれた	.904	-.204	-.047	.654
子どもの頃 私は母親と相性が良かった	.810	-.082	-.021	.597
子どもの頃 親は私を大好きだった	.795	.019	-.008	.650
子どもの頃 私は親から愛されて育った	.711	.069	.101	.547
養育者が育ててくれたように 自分の子どもを育てたい	.666	.195	-.059	.641
私は自分の母親（父親あるいは養育者）のようになりたい	.620	.206	.012	.560
子どもの頃 親は私の意向を尊重しなんでも私の好きなようにさせてくれた	.427	-.151	-.147	.168
第2因子 父親との良好な関係				
子どもの頃 私にとって父親の存在は薄かった *	.248	-.815	.057	.527
私は父親が育ててくれたように 自分の子どもを育てたい	.160	.717	.031	.653
私は父親が自分にしてくれたことを色々と思い出す	.204	.621	.210	.540
私には父親について良い思い出がありません *	.046	-.591	.099	.354
第3因子 統制的・干渉的な親				
子どもの頃 親はなにかと私の行動を制限した	-.031	.097	.653	.415
子どもの頃 親は私に対して過保護だった	.159	-.172	.600	.398
子どもの頃 私は親の顔色を見ながら育った	-.098	-.011	.575	.362
子どもの頃 親は私に対して高圧的だった	-.211	.070	.567	.377
子どもの頃 親は私に干渉した	.153	-.088	.500	.260
子どもの頃 親は私のことを理解してくれなかった	-.203	-.229	.437	.402
子どもの頃 親はいつもきちんとするよう私をしつけた	-.005	.209	.342	.132
因子相関				
因子 1	.534	-.157		
因子 2	.534		-.203	
因子 3	-.157	-.203		

表3 育児に向かう態度（養育性）のパターン行列結果【女子】

項 目		因 子				共通性
		1	2	3	4	
第1因子 乳幼児の養育・世話に対する自信						
	幼い子どもの世話には自信がある	.867	.021	.028	-.051	.732
	幼い子どもがぐずっている時、上手くなだめることができる	.863	-.001	.034	-.028	.711
	赤ん坊をあやすのがうまいと思う	.826	.001	.048	.005	.656
	幼い子を飽きさせないで30分以上遊ばせることができる	.795	-.009	.051	-.045	.580
	大勢の子どもを相手にして遊ばせることができる	.667	.141	-.026	-.005	.587
	今すぐでも幼稚園の教師をやっていけそうな気がする	.667	-.085	.007	.022	.392
	幼い子どもの話し相手になれると思う	.567	.120	-.035	.046	.452
	将来、子どもをうまく育てられると思う	.389	-.048	-.175	.099	.238
	自分は将来わが子に慕われる親になれるような気がする	.362	.001	-.132	.099	.217
第2因子 乳幼児に対する関心・共感						
	子どもの心の動きに興味がある	-.015	.832	.048	-.001	.649
	幼い子どもの瞳にひきつけられるものを感じる	.008	.747	.021	.065	.590
	子どもが不安そうな様子のときは、それを取り除いてあげたい	.019	.747	.001	.001	.574
	幼い子どもが泣いていると、何とかしてあげたいと思う	.094	.668	-.051	-.060	.532
	テレビに小さい子どもが出てくると、興味をもって見る	.017	.650	-.049	.015	.471
第3因子 将来の育児に対する不安・消極性						
	将来毎日の生活に疲れ果ててイライラしている自分を想像する	-.042	.049	.819	-.035	.671
	将来子育てに悪戦苦闘している自分の姿を想像する	-.120	.087	.674	.052	.484
	子育てをしている間に、世の中の動きから取り残されるだろう	-.010	.025	.648	-.004	.413
	子どもがわがままなことを言っているのを見ると叩きたくなる	.178	-.246	.468	.081	.283
	子育てにはいろいろわずらわしいことが多いと思う	-.013	-.011	.391	.129	.171
	子育てのために、地域社会の人と協力することは難しいと思う	.020	-.027	.342	-.131	.140
第4因子 育児に関する地域資源への期待と活用志向						
	子どもを育てる時、近所の人に助けてもらおうだろう	-.010	-.003	-.045	.686	.470
	子どもの教育に必要ななら、役所に交渉にいこうだろう	-.007	-.005	-.010	.579	.331
	子育てを楽しむために、近所の育児サークルに入るだろう	-.024	.126	-.030	.475	.278
	子どもに伝えたい地域の伝統がある	.046	.021	.022	.469	.241
	育児中、気分転換のために子どもを近所の人に預けようと思う	.047	-.083	.147	.459	.221
	因子相関					
	因子1		.565	-.396	.258	
	因子2	.565		-.389	.344	
	因子3	-.396	-.389		-.036	
	因子4	.258	.344	-.039		

表4 育児に向かう態度（養育性）に関する行列パターン結果【男子】

項 目		因 子				共通性
		1	2	3	4	
第 1 因子 乳幼児の養育・世話に対する自信						
幼い子どもがぐずっている時、上手くなだめることができる		.933	-.081	.115	-.016	.767
幼い子どもの世話には自信がある		.882	-.047	.008	-.007	.731
赤ん坊をあやすのがうまいと思う		.794	.022	.076	-.028	.621
幼い子を飽きさせないで30分以上遊ばせることができる		.785	.023	.016	-.022	.623
今すぐにでも幼稚園の教師をやっていけそうな気がする		.727	-.066	.169	-.061	.451
大勢の子どもを相手にして遊ばせることができる		.662	.144	-.082	.063	.626
幼い子どもの話し相手になれると思う		.553	.212	-.096	.075	.553
将来、子どもをうまく育てられると思う		.494	.046	-.036	.033	.289
自分は将来わが子に慕われる親になれるような気がする		.396	.043	-.063	.150	.246
第 2 因子 乳幼児に対する関心・共感						
小さい子どもを見ると自分も笑顔になっている		-.020	.800	-.088	-.032	.664
幼児の姿を見かけるとつい目で追ってしまう		-.001	.788	.129	-.159	.525
子どもが遊んでいるのを見ていと楽しくなる		-.117	.783	-.064	.009	.564
子どもが不安そうな様子のときは、それを取り除いてあげたい		-.053	.679	-.017	.129	.491
幼い子どもの瞳にひきつけられるものを感じる		.114	.626	.032	-.016	.464
テレビに小さい子どもが出てくると、興味をもって見る		.076	.590	.188	-.008	.359
子どもの心の動きに興味がある		.059	.579	.058	.093	.399
幼い子どもが泣いていると、何とかしてあげたいと思う		.133	.516	-.093	.013	.408
第 3 因子 将来の育児に対する不安・消極性						
子育てをしている間に、世の中の動きから取り残されるだろう		.110	.066	.726	.114	.543
将来毎日の生活に疲れ果ててイライラしている自分を想像する		-.178	.015	.714	.066	.594
子どもがわがままなことを言っているのを見ると叩きたくなる		.143	.041	.670	-.087	.404
育児中、気分転換のために子どもを近所の人に預けると思う		.167	.036	.486	.070	.255
将来子育てに悪戦苦闘している自分の姿を想像する		-.217	.045	.482	.117	.317
子育てのために、地域社会の人と協力することは難しいと思う		.052	-.066	.455	.006	.222
幼児の遊び相手になれる自信はない		-.243	-.171	.450	.058	.418
子育てにはいろいろわずらわしいことが多いと思う		.018	.127	.418	-.220	.158
子どもが幼い間は、母親が子どもを育てるのが望ましい		.112	-.027	.331	-.060	.106
第 4 因子 育児に関する地域資源への期待と活用志向						
子育てを楽しむために、近所の育児サークルに入るだろう		.066	.007	.011	.711	.540
子どもに伝えたい地域の伝統がある		.191	-.244	-.050	.637	.420
子どもを育てる時、近所の人に助けてもらおうだろう		-.086	.126	.023	.600	.388
子どもの教育に必要ななら、役所に交渉にいくであろう		-.085	.046	.147	.585	.387
子どもを通じて新しい世界が広がると思う		-.024	.146	-.225	.429	.266
因子相関						
因子 1			.544	-.182	.626	
因子 2		.544		-.319	.265	
因子 3		-.182	-.319		.170	
因子 4		.262	.265	.170		

表5 被養育体験の3下位尺度得点と養育性の4下位尺度得点との相関係数

		乳幼児の養育・世話に 対する自信	乳幼児に対する 関心・共感	将来の育児に対する 不安・消極性	育児に関する地域資源 への期待と活用志向
親との 良好な関係	女	.202**	.190**	-.249**	.050
	男	.175*	.241**	-.007	.243**
父親との 良好な関係	女	.125**	.161**	-.193**	.112**
	男	-.014	-.044	-.218**	-.010
統制的・ 干渉的な親	女	.010	.026	.198**	-.005
	男	.081	.038	.385**	.112

*<.05, **<.01 (両側検定)

表6 養育・世話体験得点と育児に向かう態度4下位尺度得点との相関関係

		乳幼児の養育・世話に 対する自信	乳幼児に対する 関心・共感	将来の育児に対する 不安・消極性	育児に関する地域資源 への期待と活用志向
養育・世話 体験	女	.202**	.190**	-.249**	.050
	男	.175*	.241**	-.007	.243**

*<.05, **<.01 (両側検定)

親との良好な関係」については、女子では、育児に向かう態度の下位尺度すべてとの間に有意な相関（「将来の育児に対する不安・消極性」とは負の関係）が見られたのに対し、男子では、「将来の育児に対する不安・消極性」とにのみ有意な負の相関が認められた。最後の「統制的・干渉的な親」については、女子・男子ともに「将来の育児に対する不安や消極性」との間に有意な負の相関が見られた。

4 考察

本研究では、親からの被養育体験（親や父親との関係性の認知）と、他者等（ペット・高齢者・乳幼児・小学生）の養育・世話体験とが、育児に向かう態度とどのように関連するのを探った。結果的には、有意な関連が多く認められたが、その相関の数値は非常に低いものであった。これは、質問項目の妥当性と関連しているのではないかと思われるが、低い相関であった。点を考慮しつつ、親との関係性と養育・世話体験が、育児に向かう態度の形成とどのような関連をもち、どのような経験が広い意味での養育性の形成に必要であるのか考察する。

（1）被養育体験における父親との関係認知と育児に向かう態度の形成

本研究では、被養育体験として父親との関係性に注目して項目構成を行った結果、被養育体験に関する3つの下位尺度のひとつとして「父親との良好な関係」が得られた。

女子と男子では、若干項目内容が異なっており、共通する項目（内容）は、「父親が育ててくれたように自分の子どもを育てたい」「父親が自分にしてくれたことを色々と思い出す」「父親について良い思い出があまりない（逆転項目）」であったが、特筆すべき相違は、女子では「父親との相性」、男子では「父親の存在感が」父親との関係の特性として挙げた点である。父親との関係性は、女子にとっては心地よさを与える存在として、男子には意識させる存在として認知されているのではないかと思われる。

養育性の形成という観点からすれば、成長に伴って育児に対し距離を取りがちになるとされる男子にとっては、「思い出が多く・存在感があり・同じ様な育児をしたいと思えるモデル」としての父親に育てられることが、将来の育児に対する不安・消極性を抑制する効果が期待できることが示唆される。また、女子にとっては、一般的に同性の親からの影響によって養育性が育まれやすいと考えられているが、本研究では、父親が積極的に育児にかかわることも、女子の養育性にポジティブな影響を与えることが推察される。

しかし、ここで留意したい点は、親との関係性をネガティブに認知することが、必ずしも育児に向かう態度（養育性）の形成に関するすべての尺度と負の関係にあるわけではないことである。大島（2014）は「自らの被養育体験がそのまま養育行動に影響するわけではない」とし、社会の中にある多様な価値観や視点を選択・統合していくことで新たな父親像・母親像を作り出す若者の変容可能性に言及している。この意味で、日常的な親からの被養育体験に加えて、こうした価値観や視点を取り入れる機会として、他者等（ペット・お年寄り・乳幼児・小学生）を養育・世話する体験は重要となってくる。

（2）継続的・累積的な養育・世話経験と育児に向かう態度の形成

本研究では、幼少期から他者等（ペット・高齢者・乳幼児・小学生）の「養育・世話体験」の積み重ねが豊富なほど、女子・男子ともにその養育性の形成にポジティブな影響を与えることが明らかとなった。この結果は、岡本ら（2004）の知見の一部である「子どもと高齢者についての学習・ふれあい体験が親準備性と強く関連する」を補強するものとなっている。

また、この結果は、日常的に他者等と交流したり、他者等の世話をしたりした経験があるかどうかを尋ねた結果得られたものであるため、「あり」の回答の中に学校等での体験の学習が含まれていないとは断言できない。しかし、この結果が示唆する重要な点は、広い意味での養育性形成にとって、間隙的であっても、養育・世話体験を継続的に蓄積していくことが効果をもつ可能性である。その意味で、日常的に近隣地域において乳幼児等と自然にかかわる機会が得られるような地域関係づくりが求められることに加え、成育過程で繰り返し体験できるような機会を提供することが望まれる。

（3）育児技能獲得の自覚および地域資源活用志向

本研究では、育児に向かう態度の下位尺度として、「育児に関する地域資源への期待と活用志向」と「乳幼児の養育・世話に対する自信」とを導出することができた。子どもが誕生し親となった時、単に乳幼児への関心・共感性が備わっているだけでは、養育者としての役割が付加された生活が安定したものとなるとは限らない。自分が居住する地域内の諸資源（人的資源も含む）への信頼とその活用に対するレディネスがあること、乳幼児の養育・世話に対する一定程度の自信に基づく有能感が備わっている必要がある。

今回の結果では、女子に関しては、育児に積極的にかわる父親に育てられたことと養育・世話体験の蓄積が豊富であったことが、地域資源への期待と活用志向および乳幼児の養育・世話に対する自信につながることを示唆された。また、男子に関しては、父親との良好な関係が、将来の育児に対する不安や消極性を軽減させ、親（父母）から大切に育てられることと養育・世話経験の蓄積体験が、地域資源への期待と活用志向および乳幼児の養育・世話に対する自信につながることを示唆された。こうした性差の要因については、今後さらに明らかにする必要があるが、親ないしは父親との関係を肯定的に認知していることに加え、日常生活の中で自らが他者を世話する体験の継続的な積み重ねによって、育児に向かう態度（養育性）としての「育児に関する地域資源への期待と活用志向」および「育児に対する自信」が高められると考えられる。

以上から、女子にとっても男子にとっても、「父親との関係」が出発点となり、それが、社会参加や周りとの親和的な関係性を育む契機となり、さらに、社会資源への期待感やソーシャル・サポート等への志向性につながったり、子育てに必要な知識や技術の獲得につながったりしている可能性が垣間見られた。つまり、「父親との良好な関係」が養育性の形成を促す基盤の一つとなっていることが、この研究を通して示されたと言える。また、日常生活の中で自らが他者等を世話する体験の継続的積み重ねが補完的に機能し、それをより効果的なものにしていくのではなかろうか。

さらに、本研究では、被養育体験のうち「親との良好な関係」「父親との良好な関係」と「幼少期からの養育・世話体験の積み重ね」の豊富さが肯定的な養育性の形成と関連すること、被養育体験のうち「統制的・干渉的な親」が養育性形成に抑制的に働くことが示された。これからの若者支援プログラムの編成を考えるにあたって、ふれあい体験学習とともに、日常生活の中で様々な世代の他者の世話を多様な形で経験できるという視点の導入も必要であろう。また、親との良好な関係や父親との良好な関係を持てなかったと認知している大学生でも、寺田（2005）が、中・高校生を対象に実施したふれあい体験学習の効果として、参加者相互にポジティブな変化があることを指摘している。ここから、日常生活での多様な多世代とのふれあい体験が、大学生が認知している親イメージや子ども・子育てイメージをポジティブな方向に変容させる可能性が示唆され、これからの若者支援（次世代育成）プログラム等は、相互関係的な観点からの効果を多角的に捉えて編成していくことが望まれる。

<謝辞>

本研究の質問紙調査に協力して下さった兵庫県内の大学生の皆様に感謝申し上げます。

<付記>

本研究は、兵庫県健康福祉部こども局から研究委託（平成23年度「子育て支援調査研究事業」）を受けて、「ひょうご子育て支援大学間連絡協議会」内の分担グループによって実施した研究の一部を、新たな視点から再分析したものである。

<文献・資料>

- Fogel, A.D., Melson, G.F. & Mistry, J. (1986). Conceptualizing the determinants of nurturance: A reassessment of sex differences. In A. Fogel & G.F. Melson (Eds.), *Origins of nurturance: Developmental, biological, and cultural perspectives on caregiving*. Hillsdale, NJ : Lawrence Erlbaum Associates. 53-67
- Gordon, M. (1999). The roots of empathy. *Community Stories*. Ottawa, ON: Caledon Institute of Social Policy, June 1999, Journal Article
- 菱谷純子（2009）. 青年期の次世代育成力尺度の開発とその検討. *母性衛生*, 50, 132-140.
- 井上義朗・深谷和子（1986）. 親になること. 小林登ほか編 新し
い子ども学 2 海鳴社 71-94.
- 石川清美（2000）. 赤ちゃんふれあい体験学習の効果；2 アンケート結果からみた効果. *小児保健研究*, 59（2）, 159-162.
- 伊藤葉子（2003）. 中・高校生の親性準備性の発達. *日本家政学会誌*, 54, 801-812.
- 小嶋秀夫（1989）. 養護性の発達とその意味. 小嶋秀夫編 乳幼児の社会的世界. 有斐閣, 79-111
- 棚澤谷子・福本俊・岩立志津夫（2009）. 大学生における過去の被養護・養護体験が現在の養護性（nurturance）へ及ぼす影響. *教育心理学研究*, 57, 168-179.
- 牧野カツ子・中西雪夫（1989a）. 高校生の「親になることのへの準備状態」と保育教育（第1報）「準備状態」の形成に影響を与える要因. *日本家庭科教育学会誌*, 32, 51-53
- 牧野カツ子・中西雪夫（1989b）. 高校生の「親になることのへの準備状態」と保育教育（第2報）「準備状態」の測定尺度の作成. *日本家庭科教育学会誌*, 32, 55-59
- 内閣府ホームページ（2005）. 平成17年版 少子化社会白書. (本編 HTML) <http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/white-paper/measures/w-2005/17webhonpen/html/h1220210.html>.
- 岡本祐子・古賀真紀子（2004）. 青年の「親準備性」概念の検討とその発達に関連する要因の分析. *広島大学心理学研究*, 4, 159-172.
- 大島聖美（2014）. 青年の親に対する認知の重要性；青年期の親子関係研究及び親性準備性教育の観点から. *広島国際大学心理学部紀要*, 2（1）, 69-78.
- 幸順子・浅野敬子（2012）. 母親の育児意識に関する研究；子育て支援利用者の調査回答パターン分析. *名古屋女子大学紀要*, 58（人文・社会編）, 187-195.
- 斉藤真緒（2000）. 親性の「個人化」—家族の分析視点としての「個人化」論の可能性—. *立命館産業社会論集*, 36（3）, 49-70
- 佐藤洋美（2004）. 乳幼児とのふれあい体験学習が中学生の子育てに対するイメージに与える影響. *日本生活体験学習学会誌*, 4, 35-54.
- Schonert-Reichl K. A., Smith, V., Za-dman-Zait, A. & Hertzman, C. (2011). Promoting Children's Prosocial Behaviors in School: Impact of the "Roots of Empathy" Program on the Social and Emotional Competence of School-Aged Children, *School Mental Health*, 4, 1-21.
- 田中義人（2000）. 赤ちゃんふれあい体験学習の効果；3 感想文からみた効果. *小児保健研究*, 59（2）, 163-165.
- 寺田清美（2005）. 赤ちゃん和小中高生とのふれあい交流事業（授業）の重要性；スタッフとして現場からの声. *東京成徳短期大学紀要*, 38, 45-56.
- 寺見陽子（2015）. 母親の育児ストレスの背景とソーシャル・サポートに関する研究：母親の育成経験と子育て環境との関連 *Journal of the Faculty of Human Sciences, Kobe Shoin Women's University = 人間科学部篇：JOHS*（4）, 59-73.
- 寺見陽子・南憲治（2015）. 父親の家事・育児意識と参加行動の変容とその変化の規定要因に関する研究—参加行動の変容と父親の内的特性との関連に注目して—. *保育学研究*（投稿中）,
- 寺村ゆかの・川谷和子・伊藤篤（2007）. 地域連携にもとづく次世代育成プロジェクト「赤ちゃんふれあい体験学習」の短期的効果に関する研究. *保健の科学*, 49（1）, 71-77.
- 戸田まり（1992）. 親になる準備. 詫摩武俊編 出会いと関係の心理学 新曜社. 59-63.